

いんとく
「陰徳」青森県 せいりょうじ 清涼寺住職 かきざきこうりゅう 柿崎宏隆

四月、全国からお釈迦さまとのご縁を紡ぎに、沢山の方がご本山での一週間の修行、報恩大授戒会に身を投じます。その方々のお手伝いの為、これまた全国から僧侶の方々も集まってこられます。私もお手伝いで授戒会に例年参加しております。

私には、同じくお手伝いで来られている、大好きなお坊様がいます。仮にTさんとします。

Tさんは、食事の後、いつも食べた器にお茶、もしくはお水を注ぎ、一つ残した漬物などで、入れ物をぬぐい、最後飲み干します。ソース含め、どうしても残ってしまう小さな食べ物を、残さず全ていただくためです。何一つ粗末にしないという、禅の修行道場における食事の正式な作法です。

一度、定食屋さんでご飯をご一緒した事があります。Tさんは、外食においても、同じようにされておりました。

私はと言えば、周りに合わせそれをやったりやらなかったり…。

数年前のお話です。私の目に焼き付いたTさんの姿があります。

その年の授戒会も無事終わり、帰りの駅までご一緒しました。私は在来線の上り電車。Tさんは下り。上りの電車がすでにホームに入って停車しておりました。

Tさんは「じゃまた」と言って離れていきました。次お会いできるのは半年後、もしくは一年後です。見送りを期待したわけではありませんが、あっさりとした挨拶に、少しさみしく感じました。

電車に乗り込むと、発車まで一分少々お待ちくださいとのアナウンス。私は入口と反対側のドアにもたれ、出発を待っておりました。

そして出発のベルと共に、ふと何気なく、閉まる扉の方に移動して、ホームを眺めました。そこには柱の陰で、合掌し頭を垂れ、静かに私の電車を見送るTさんの姿がありました。

Tさんが立っていた場所は、電車の進行方向とは逆ですから、私がたまたまのぞかなければ、その姿に気付くようもありません。

相手を大切に思う姿は、ついアピールしたくなるものですが、Tさんはどんな時も、自分の気持ちや生き方を押し付けたりしません。

人が見てようといまいと、そこには左右されない生き方のさわやかさを、いつも学ばせられるのです。

※本年(令和3年)の本山の報恩大授戒会はコロナ禍に考慮し5日間の修行となっております。